

注目のキーワード「フィルムカメラ」

いまやスマートフォンは、電話やSNS、動画視聴だけでなく、電子決済や動画編集など幅広い機能を持ち、現代生活に欠かせない存在となっています。日本国内の普及率は95%を超え、街でスマートフォンを持っていない人を見かける方が珍しいほどです。特にカメラ機能の進化は著しく、誰もが手軽に高画質な写真や動画を撮影できるようになりました。こうした便利さが当たり前になった今、逆に「あえて不便さを楽しむ」フィルムカメラの魅力が、静かに注目され始めています。

フィルムカメラは撮影時にフィルムの装填が必要で、その場で写真の確認もできません。現像には時間と費用がかかり、またフィルム自体も世界的にメーカーが少なくなり、価格が上昇しています。カメラ本体も希少価値が高まればプレミアム価格がつくこともあり、効率やコスト重視の現代社会の価値観からは「非効率」と映るかもしれません。しかし、多くの人がこの「不便さ・気まぐれさ」に特別な魅力を感じています。限られた枚数だけしか撮れない分、一枚ごとに込める思いが強くなり、現像が仕上がるまでわからないドキドキ感もデジタルにはない楽しみです。レトロなデザインや機械的な操作、シャッター音など身体で感じる感覚も、心惹かれる要素です。さらに、フィルム写真独特の粒子感や柔らかな色味、自然光の美しさにはデジタル写真では表現できない深みがあります。

こうしたフィルムカメラの魅力が若者を中心に再評価され、SNS上でもフィルム写真の投稿が増えています。有名アーティストや俳優が自身の作品を公開することで、さらに注目が集まっています。効率や即時性が重んじられる時代に、あえて手間をかけて写真を撮るといった体験が、忙しい日常にゆったりとした時間をもたらしてくれるのです。スマートフォンに慣れた今だからこそ、フィルムカメラによる「不便さ・気まぐれさの魅力」に触れてみる価値があるでしょう。偶然の美しさや時間の流れを実感することで、新たな感性に出会えるかもしれません。デジタルが主流の今、あえてアナログの世界に足を踏み入れてみるのも一興です。

(総合調査部 政策調査グループ 課長補佐 野崎ひばり)

時事雑感

今年も暑い夏がやってきた。西日本では6月27日に一斉に梅雨明けが発表され、九州北部、中国、四国、近畿は統計開始以来最も早い梅雨明けを記録した。一方、東日本では梅雨明けこそ発表されていないものの(7月7日時点)、太平洋側を中心に一日中雨といった日はほとんど無い。代わりに、短時間に大雨が降る“ゲリラ豪雨”が一段と目立つようになってきた。世界に目を転じて、局地的な豪雨や記録的な高温、干ばつなどに見舞われている。

もはや日常的ともいえるようになった“異常気象”だが、その源泉は地球温暖化にあるとされている。IPCC(気候変動に関する政府間パネル)によれば、この100年で地球の平均気温は1.1度上昇したそうだ。一見小さな変化のようだが、過去1万年の間に、1度もの気温の変化がわずかに100年の間に起きたことはなかったとされている。気温の急激な上昇は、氷河などの融解と、それに伴う海面上昇や異常気象を通じて、生態系にも急激な変化を及ぼす。環境の変化に耐えられない種は絶滅する一方で、環境に適合した種が他を圧倒するようなことが起こりうるとされる。

現代のような高温の時代を人類は経験していないのかというと、そうではない。約9000~5000年前、完新世温暖期と呼ばれる時代の気温は現代に近かったとされる(現代の方が0.2度ほど高い)。約1.2万年前に氷期が終わり、温暖化が進んだピークの時期にあたる。この頃の人類はどのような状況にあったかといえば、環境の変化を受けて農耕や牧畜が拡大して定住化が促進され、やがて都市国家が誕生、文明が一気に発展した。その後地球の気温は緩やかな上下を繰り返していたが、産業革命以降に急上昇を始めたのである。その原因は二酸化炭素の大量放出などによる“人為的”なもので、それまでの自然現象による気候の変動とは異なる。自然の変化の恩恵を受けて文明を発達させた人類が、その文明によって、恩恵をもたらした環境を破壊することで“淘汰される”側に回ってはいけない。

(鳶峰 義清)